

## 逸見（狩野）一信の絵画学習に関する検討—薬研堀の文化人ネットワークと修行時代 白木菜保子（フリーランス）

本発表は、東京・芝の増上寺が蔵する「五百羅漢図」〔以下、増上寺本とする〕を描いた逸見（狩野）一信（1816～63）の修行時代に着目し、一信が西洋画法をとまなう仏画制作に至った経緯について考察する。制作に10年の歳月をかけた全100幅の増上寺本は、一信による絵画学習の集大成と言える。梅沢恵氏は、増上寺の仲介で一信が鎌倉・円覚寺が蔵する中世の五百羅漢図を閲覧する機会を得たことに言及し、増上寺の手厚いバックアップ体制を明らかにした。発表者は増上寺本制作に際し、一信が学僧から袈裟の着用法等について指導を受け、近世後期に復興運動が進められた戒律の知識を反映して作画したことに言及した。しかし、本作は戒律や羅漢図学習だけで説明し尽くせない、豊かな絵画表現を有している。そのため、学僧の関与が及ばない、一信個人の志向について改めて検討を行う必要がある。

一信の修行時代における作例からは、残された依頼主の情報や年記などの情報が少なく、当時の動向を十分に把握することが難しい。先行研究では作例の款記による編年、および絵入り版本・浮世絵など印刷物との関連、一信が学んだ複数の画派との共通点について指摘がある。特に、筆墨技法には狩野派学習が認められるとの指摘があるが、一方で増上寺本および成田山新勝寺の作例以前に制作上の重要な立脚点がある可能性には、未だ詳細な議論が及んでいない。

本発表では一信の修行時代を、生家を出た天保年間～増上寺本および新勝寺の作例に着手する直前の嘉永7年（1830～1854）の間とし、薬研堀（現在の中央区日本橋二丁目付近）という場所の観点から、一信の修行時代について検証する。当地は書画会が多く開かれた繁華な場所であった一方、医者住居が密集していた。薬研堀に住んだ伝承不明の狩野直信から幼名を受けて終生「一信」と号したこと、嘉永2年以降の手控え帖に蘭方医書の付図や森島中良『紅毛雑話』の写しがあること等は、これらを出版した書肆・須原屋や医者町と呼ばれた薬研堀との結びつきを示唆する。そのため、同時代の薬研堀周辺で活躍した沖一峨や佐竹永海ら谷文晁門下の画人、さらに一世代前に蘭書を参照し、漢訳蘭書に挿絵を描いた石川大浪の絵画および制作態度の比較を通して、一信の絵画における特徴と志向について考察する。

修行期における一信の銅版画や西洋画法への興味は、幕末における奇を衒った趣向と見做されてきたが、実際には実学を重んじた時代に一信が身を置いた環境の中で形成された。のちに羅漢の指や骨格にまで陰影を施し、リアリティを求めた一信の本心はあくまで仏画に寄り添うもので、写生的な肖像画に込められた文人の精神性はもとより、蘭学に精通した知識層の理解とも距離がある。人体に近接した絵画の志向は、増上寺での袈裟の着用指導や、仏師・松本良山の五百羅漢の彫刻に際して要請された、複数の角度からの下絵制作にも適合した。その結果、幕末における新奇な五百羅漢図が誕生したと結論づける。